

だが、それをみたとき、遠くにあった「日常」がようやく私のところまでかえってきたよ  
うな気がした。しかし完全にかえってきたわけではない、中途半端な、うすぼんやりした  
膜みたいなものが、まだ頭の中にかかっている、そんな気持の中で『未帰還の友に』とい  
う小説があるのを発見した。ザラザラした粗悪な紙に印刷した、うすっぺらな雑誌であ  
る。その小説は、次のようなところからはじまっていた。

「君が大学を出てそれから故郷の仙台の部隊に入營したのは、あれは太平洋戦争のはじま  
った翌年、昭和十七年の春ではなかったかしら、それから一年経って、昭和十八年の早春  
に、『アス五ジウエノック』という君からの電報を受け取った。」

私が出たのは昭和十九年のことだが、上野駅で長い間待ったこと、私が紫の袋入りの  
軍刀を渡して、生活について論ずることが、そのまま書かれていた。後半は、私のよう  
な人物が三鷹の「きくや」の娘と恋愛して（そいえば、髪の毛の長い、その娘だとい  
う女性が奥の方について、冗談に「おれ、あの人にほれようかな、酒も苦勞しないでのめ  
し」というと、例によって「パカ、おまえはすぐそういうことを言うからいけない」と言  
われたことを思い出したが）ともかく、その娘に「ノオ」と言うことで悩む、というフィ  
クションになっている。そして、この小説は、こう結ばれていた。

「僕は二度も罹災して、とうとう、故郷の津軽の家の居候という事になり、毎日、浮かぬ  
気持で暮らしている。君は未だに帰還した様子も無い。帰還したら、きっと僕のところ  
に、その知らせの手紙が君から来るだろうと思って待っているのだが、なんの音沙汰も無  
い。君たち全部が元気で帰還しないうちは、僕は酒を飲んでも、まるで酔えない気持であ  
る。自分だけ生き残って、酒を飲んでいたら、ばからしい。ひょっとしたら、僕はお  
う、酒をよす事になるかも知れぬ」

この「君」とは、もちろん、私のことだ、と思った。こんな思いで、私を待っていてく  
れたのだ。私は、すぐ太宰に手紙を書いた。無事、帰還したこと『未帰還の友に』を読ん  
だこと……。しかし、この返事がなかなか来なかった。待っているうち、友人の弟の話を  
聞いた。大学の自治会かなにかの用事で、彼らは、津軽金木町に太宰をたずねたのだが、  
私が帰ってきたことは知らないでいたという。私は、すぐにも、太宰に会いたかった。私  
は、再び、手紙を書いて帰ってきたことを知らせ、金木をたずねてもいいかと、問い合わせ  
せた。ようやく太宰からの返事がといたのは、帰ってから一月以上もたっていた。

「拝復 御ハガキいまつきました。さきのハガキは遂に来ない様子です。さて無事御帰還  
を祝す。すこしは利口になって帰って来たかな？ 先日東北大の山本君他一名が金木へ来  
て、君の無事なることを知らせてくれました。金木へはいつ来たってかまわないけど、君

たちは酒を飲みすぎるんでやっかいだ、おれの飲む酒が無くなってしまふ。九月には、私も仙台へ遊びに行くつもりです。酒をたくさん背負って行くつもりだから、それまで対面を待たうか。しかし、待ち切れなかったら、いつでも来た方がいい。突然やって来てもかまわない。歓迎するさ。からだ工合いはどうかね。大事にしたまえ」

もちろん久しぶりの太宰の手紙は、それだけで嬉しくないことはなかった。だが『未帰還の友に』を読んで、こんなにも気にかけてもらっていた、ということばかりが頭の中にある私としては、どこかもの足りないものがある、どこかなにか、そっけない隙間があるようにも思われてならなかった。とりわけ「金木へはいつ来たってかまわないけど」という言いまわしにひっかかった。遠い金木まで行くための切符の手配、食料の調達、それに太宰が「居候」している金木の実家に太宰自身がそれまでどんな気のつかいかたをしていたかは、作品『帰去来』『故郷』等々でずいぶん読まされている。この程度の「歓迎」でおいそれと出かけてゆく気持にはなれなかった。いうならば、そこにもっと大歓迎の言葉が書かれてないのが不満だったのである。そんなことを気にせず押しかけてゆける大学生たちが、癪にさわった。

一回のハガキの往復にもひどく時間がかかる。それに私は、就職口を見つけるということでもなかなか動きがとれなかった。九月に仙台に来るといふ太宰は、祖母が死んだといううことで、それがさらにのびる。そのうち十一月には上京するからその時にしようというハガキがくる。それを待っていると「十日からまた汽車の時間が変わり、何が何やら、まるで時間の予定が立たず、仙台通過はいつになる事やら、もういまは行きあたりばったりで行くより他は無くなり、それに何せ小さい子供を二人もかかえているので、汽車が満員なら乗り込めない事もあるでしょうし、上野まで何日かかる事やら、五里霧中の旅なので、仙台下車もうまくいきそうが無いんです。やっぱり東京で逢いましょう。」というハガキがきた。

なんということだ、と私は怨めしくさえあった。

ところが、その日（たしかに十一月十三日のことだ）ようやく勤めだしたばかりの新聞社に行く、机の上には

「今朝仙台に下車。駅で待っています。すぐおいで下さい。太宰」

と、まさしく太宰その人の字でザラ紙のメモ用紙に走り書きしたものが置いてあった。下の受付から回って来たのだという。私は、すぐ社を飛び出して、駅に向った。こ走りながら、おのずと顔がほころんでくるのをどうしようもなかった。

別 駅前、太宰は立っていた。黒い兵隊服を着ているのが、着流しのマント姿ばかりを見

なれていた眼には少し奇異であったが、背中を少し猫背に丸めて、あいかわらずの太宰が、やはりそこに、居た。ワッという思いで私が手をあげると、太宰も私を見つけて、あのはにかんだような笑いで、ちよっと手をあげた。すぐ目をそらす。私も下をむいて駈けた。

「待ったですか」

「いやそれほどでもない」

何から話していいかわからない。話すことは山ほどあるような気がするのだけれども。

「先生、ミニククだったですね。醜貌さらに醜を加えた感がある」

そんなことしか言えないのである。そのくせ、太宰の顔をまともには見てもられない。

太宰の服はラシャ地の兵隊服を黒く染めたもので、ズボンの一番下のところに付いてある紐を律義にしめ、兵隊靴の紐もちゃんと二度巻いて結んであった。

「バカにまた不細工な服装じゃないですか。いよいよヤケですか。もっと何とかしたのな  
いんですか」

「何もないんだ。そんなことよりどこか休む所ないか。子どもたちが疲れているんだ」

駅の構内のベンチに奥さんが長男の正樹ちゃんをねんねこに抱いて坐っていた。太宰によく似た顔つきの、眼の大きな園子ちゃんが奥さんによりかかるようにして、リングをかじっていた。入管のあいさつに三鷹に行ったときには、まだ遣い出したばかりの赤ん坊だ

ったのだ。

とりあえず駅前のホテルに交渉して、荷物を運び休むことにした。やはりまず一杯ということになって、太宰が持参したドロクをのまされた。何回も滌すとそうなるというところで、色も透明でとろんと濃厚な味がした。酒が入ると、昔と同じできこちなさがとれ、おたがいに舌もなめらかになった。「汽車が混んでね。すわれない奴がバカに威張って演説するんだ。男が坐っていて女が立っているのは『民主主義』ではない、もっと自覚しないといけないなんてね、やたら叱るんだ。なに自分が坐りたいだけなんだ。坐ったら黙ってなにも言いやしないんだよ」「もう日本はないんだよ、どこにも日本なんてないよ。無政府主義さ、無政府主義が一番なんだ。農村なんか、もうそうだぜ。誰に教えられなくて、ちゃんと無政府主義になってるよ」

奥さんも二人の子どもたちの世話をしながら、時々、私たちの話に笑顔で口をはさんだ。三鷹のころ、奥さんはほとんど私たちの居る場所には出て来なかった。お茶を出すときにも、襖から手だけ見えるという工合だった。表立たないというところで、自分を律しているようにさえ、私などには思われたのだが、それが、これほど生き生きと楽しそうにして居るのは、やはり、東京に帰ってまた親子水入らずになれるという喜びがあふれているもののように思われた。

「俺も、そろそろいいものを書くよ、うむ」

と私に威張りかけると、奥さんが、少し笑いながら言った。

「あなた、田舎に行かれてから、少し下手になられたようですわ」

「バ、バカなことをいうな。バカな奴だ」

と、太宰は大いにあわてた。私はうれしくてゲラゲラ笑った。

しかし、太宰は、そういう間にも、また汽車に乗ってその日のうちに東京に帰るのだ、と言ひ張る。私の勤めていた新聞社は、戦争中『惜別』という作品を書いたとき取材調査をし、敗戦直後からは『バンドラの匣』を連載するなど、そのころの太宰とは比較的縁が深かったのだが、ヤミ市にぶら下がっている鴨をみつめてそれを手土産に挨拶にゆき、そこでまた、何人かで街にくりだし屋前から飲むことになってからも、思い出したように、帰ることにこだわっていた。帰るのなら一気に帰ってしまいたい、つまらぬ人づき合いに心と時間をわずらわしたくない、という太宰の気持は今なら察しがつく。だが、私は、ただ嬉しいだけだった。ようやく一泊することにきめたのは、日もくれかかってからである。駅前のホテルに置き放しにしてきた奥さんに連絡にゆくと、やはり気嫌よく笑って「どうせそうなると思ってましたわ」と言う。その夜は大一座になった。お国自慢のさんさ時雨をみんながうたい、私ができないという、「こら失礼な奴だ、何かやれ」と太

宰はむやみに威張り、うるおぼえの歌舞伎の声色をやりだすと、「あ、こら、やめろやめろ、みっともないバカな声だすな。もう一生やるな、俺の恥になる」などと大声をあげては何度も叱った。

翌日、駅まで送りながら、「昨夜、先生、ずいぶん他の人からんでいましたよ。酒癖悪くなったのかな」と言うのと、太宰は「そうか、なんもおぼえてないよ。大酒のむ時は人からむに限るんだ。そうしないと飲めるもんじゃないよ」とニコリともしないで言った。奥さんや子どもたちと街を一めぐりして駅に行った。ヤミ屋の屋台で手巻き煙草を買った。汽車はわりにすいていた。しかし「子どもが外をみたがるから、ガラス窓の席ないかな」と言うのに、板張りの小さな明り通りのガラス窓がついている席しかとれなかった。見送りに来た初対面の私の妻に、太宰は深々と頭を下げ、堅苦しくていねいに挨拶をするのだった。

版もしてみたいという計画をたてていた。その用事で上京したのである。

三鷹の太宰の家は、少し古びていたんでいるようなところもあったが、相かわらずであった。しかし、飲むところは戦争前とは、ずいぶんちがっていた。駅前を太宰の家の方向とは逆に右にまがって、どぶ川のところにあつたりなき屋、そのちようど裏手にあつた狭い、西日の当る飲み屋、駅前広場の左手にある大衆酒場など、ただ、稲荷小路の例の壁に奇妙な丸窓のある飲み屋だけは健在だった。

太宰は、背広を着ていた。「開襟シャツ」というやつに毛糸のセーターを着込み、その上に上衣を着ていた。「やあ、先生、案外スマートじゃないですか、ちよつといいな」

「うん、セルの着物なんだ。そいつで作った」「でも、先生も、もうそろそろ四十でしよう。だんだん脂ぎっていやらしくなるね」例によって例の如きやりとりになった。「バカ。俺は進駐軍の兵隊に、You are noble って言われたんだ。やっぱりお前なんかの見る眼とは違うぞ。解る人には、ちゃんと解るんだ」

太宰はこんなことを言った。

「この時代はね、フレキシビリティだよ。フレキシビリティということをおぼえなくてはいかん。え、たとえばだな、おまえが俺の悪口を、だれでもいい他の作家のところに行つてさ、言ったって俺は平気だよ。ウワア塩、塩、塩下さい。きよめちやうから、どうもあ

いつのところに行くのはたまらない、だなんてね。そう言ったって俺は平気だ。うむ。時々太宰も淋しいだろうなと思ひ出してくれたらいいんだ。愛情ってのは、そういうものなんだよ。「純粹」だなんて下らない。愛情が大事だ。「純粹」なんて、おまえ、俺はおまえが嫌いだから絶交する、「純粹」を守らねばならぬなんて言うたら、あれは人を傷つけているだけじゃないか。人を傷つけるのは『悪』だよ」「ウワア、塩、塩……」というところでは身ぶりまでまじえて異様に熱がこもっていた。その夜ずいぶん酔ってから二度この話をくりかえした。

それから太宰は発表されたばかりの『ヴィヨンの妻』の自慢をくりかえした。こういうのが、新しい人間の生き方、モラルだと言った。この作品の中の「文明の果の大笑い」という言葉をとりあげ「こういうところに注意しなくちゃいけない。こんな言葉を、これまで誰が言ったことがあるのかね」とも言った。「俺の作品はシャンペンだよ、上等なんだ。他の作家のものなんてカストリじゃないか。評論家なんて何もわからない、すぐきくからカストリの方がいいと思つてやがる。だけどカストリは本当の酒じゃないんだ」と言うのであった。こんな調子で威張るのは、昔からのユーモアにはちがいない。しかし、いまはそのどこかにいらいらしたものがあるように思われた。

と、たしか太宰は言った。華族ではなかった。「没落してゆく話だ。あの夕陽の傾いてゆく悲しさだよ。どうだ、『斜陽』いい題だろう」と言った。

ところで私は、そのとき、気なしに「その作品、ほくに出版させてもらえませんか」と言ってしまった。仙台でこれからやろうとしている仕事の計画については、太宰の家で話してあった。田舎にいて、戦後の出版界の事情など知らない私は、昔からの馴染がいに、太宰にたのめば何とかしてくれそうな気持もあったのだ。太宰は、「バカ、そんなことはできませんよ。おまえは、ほんとうにバカだよ」と言っただけで、そばにいる若い編集者の方をみて露骨に苦笑してみせた。太宰の「バカ」はきまり文句だが、いつもは親愛の表現であった。さっきから黙々として私たちのやりとりを聞いていた、おとなしそうなその若い編集者も、かすかに困惑したような笑いをうかべていた、私は、なるほど東京の「出版」というのは、そういうものだったのか、とはじめて悟るようなところもあったのだが、やはりさびしかった。

それから上京する度に、三鷹をたずねたが、太宰はいつも家には居なかった。駅近くのどこかに部屋を借りて、そこで仕事をしているというのである。例の若松屋といううなぎ屋に行って、連絡してもらうことになっていた。たいていは、裏手ののみ屋で待った。太宰の着ているものは、もう兵隊服やセルのつくり直しの背広ではなく、昔のような着流

し、冬はそれに二重回しという姿になっていたが、しかしなにかが少しずつ違ってきているようであった。そして、何度目かの時、私は、そこに入ってきた太宰に、いきなり「なんだ、おまえか」と言われた。太宰にとって、私は、もうそれぐらいの存在でしかなくなっているようで心細い感じがした。

それでも飲めば、やはりいつものような応酬で楽しくないことはなかったが、昔のようにはいかなかった。そこには、かつて、三田や堤などと一緒にいて、太宰との間に成り立っていたジカな気を許しあった気分はない。太宰と二人きりになれることは殆んどなく、最初は二人だけでも一座する連中はすぐふえて、落ち着いた気分ではなかった。その中で私は、自分は昔からの太宰の最も親密な「弟子」の一人だということをついにわからせようとするから、気持に堅いこわばりができた。太宰もそんな私がわずらわしくなるのだろう。飲んでいられるうちにはじめの親密さは失われて、大一座の中で太宰はあえて私を無視するようになった。正確には私がそう感じた、ということであろう。が、そのために、私は、しばしば取り残されているような気持にさせられた。だが、太宰の飲み方もまた昔とは違ってきたように思われた。酒が少しも楽しそうではなかった。そのくせ、次から次にいくらでも飲んだ。飲んでいて見も知らぬ他人に話しかけるといふようなことも、昔は絶対にしないことだった。また、しばしば大笑いはしても、他に傍若無人に見えるようなことは、とり

わけ嫌った。しかし、いまは、そんなことに全く心くばりをしていない、投げやりな態度にさえみえた。駅前通りの屋台のおでん屋で、何人かはハミ出しながら賑やかにのんでいる時、彼は先からその店でおでんを食べていた二人連れの女性に、いきなり調子のよいことを話しかけ「ぼくは、太宰という小説家だけどね」などと言うのだった。これも昔、堤や私と飲んでいて大威張りし、その女給さんが知っているかどうかということになって「ぼくは太宰治という小説家なんだ」と言うと、誰もそんな名前を知ったものはおらず、抱腹絶倒したことがあったが、その時の調子とはいうまでもなく明かにちがっていた。「進駐軍関係」のようにみえる女の人たちだが、そのうち太宰は、駅向うのアパートに帰るといふ彼女たちを送ってゆくと行って、あっといふまに居なくなってしまった。

いずれにしても私は、太宰に逢う度に満たされない思いで、帰るようになった。しかし私が、太宰からないがしろにされているとはどうしても思いたくなかった。だから私は、田舎に帰ると、青年たちに太宰に聞いたことをしきりに吹聴しては、太宰との親密な関係を誇示したりもした。そして今度は、という思いをひそかに持ちながら、また上京するのである。だがそのことに固執するから、満たされなさの度合は、そのつど深まってゆくようになった。よそに出かけて留守ということ、逢えないままに帰ることもあった。

それに、私自身の生活のこともあり、学生時代のようにそう一図に太宰のことばかり思いつめていたわけにはゆかなかった。復員して帰った翌年、すぐ妻は子どもを生んだ。家には、母と弟が一人いた。六百元以上は封鎖されてしまうという新聞社の賃金ではどうにもならない。もっとも私は、衣料やなにかのヤミ売りをし伯父からの送金をうけていた母の才覚をいいことにして、一度も月給など持って帰らなかつたが、しかし何とかしなければならぬという思いには賣められていた。「良書頒布会」などという計画もそのためである。それが偶然のことから発展して、仙台の目抜き通りに書店と画廊とを兼ねた、「芸術的」な雰囲気のみちたサロン風の喫茶店をつくろうということになった。土地は、私の高等学校時代の後輩が父親が死んだので当主となり、所有地を出資するというのである。そしてたちまちのうちに出来あがった店は、若い人たちや大学の先生でずいぶん繁昌したが、建築資金の一部を高利貸に借りたことからつまずきがきた。すぐに借金はふくれ上がつて、新しく借金をしては借金の利息の支払いに当てるという典型的な自転車操業になった。それほどしばしばは上京できなくなったし、上京するのは、親戚や友人から借金のためである。金策のあいまに太宰にあいに行くのだから、何かと落ち着かなかつた。

そして、私は、太宰の書くものにも少しずつ、しっくりは来ないところがあるのに気づくようになっていた。たとえば太宰は『苦惱の年鑑』というのを書いた。私はそのような

「苦惱」などとあからさまな題をつける太宰が不満だった。そしてその中の「天皇の悪口を言うのが激増して来た。しかし、そうなってみると私は、これまでどんなに深く天皇を愛して来たのかを知った。私は、保守派を友人たちに宣言した。／十歳の民主派、二十歳の共産派、三十歳の純粹派、四十歳の保守派。そして、やはり歴史は繰り返すのだから。私は歴史は繰り返してはならぬのだと思っている。／まったく新しい思潮の抬頭を待望する。それを言い出すには、何よりもまず、『勇氣』を要する。私のいま夢想する境涯は、フランスのモラリストたちの感覚を基調とし、その倫理の儀表を天皇に置き、我等の生活は自給自足のアナキズム風の桃源である」という最後の三節にひっかかった。仙台で久しぶりに再会した時の「無政府主義論」には、感覚としてまだわかるようなところがあった。だが、ここまでくると、もうついてゆけない。特に天皇に対する感覚は、どうしてもピンとこなかった。なぜ天皇を「倫理の儀表」としなければならぬのか。それに天皇は、そんなものになれるのだろうか。「自給自足のアナキズム風」になれば一番先に悲鳴をあげるのは太宰自身ではないかななどと、皮肉っぽく考えたりしていたのである。

そんな、いわばイデオロギー的なことではなく、普通の作品でも、私はなかなか昔のようにみずみずしい感動をもって読めなくなっていた。思い返してみると、昔でも全部が全部、太宰の作品に陶醉しきっていたというわけではなかった。しかし、いいなあと思う

作品が今は時たまのことではなかったのである。太宰のいう「ジャンペンの味」「軽み」ということが、私にはわからないのか、とも思った。そして、あれほど、太宰が自慢もし、ジャーナリズムに前評判の高かった『斜陽』にも、実のところ感心できなかった。連載していた第何回目分かをちよと書きあげたという時に行き合わせて、『ヴィヨンの妻』の「文明の果の大笑い」というのと同じように『斜陽』の女主人公の言葉だという「はばむ道徳を、押しつけられませんか？」をしきりに口にして「こんなですよ。新しいモラルとはこういうものなんだ」と、自慢した。実のところ私には「文明の果の大笑い」も「はばむ道徳」も、その言葉でほんうに太宰が何を言いたいのか、よくわからないところがあったが、『斜陽』には、太宰が力をこめて見聞きしていただけに、大きな期待があった。私は、最初の二頁からワクワクするような思いで、この作品を読もうとした。ところが、そういう私の態度のせいもあったのだろう。なかなかそのように、作品の世界の中に入りこめないのである。そして、無理にも自分はワクワクしているのだと思いつもうとした。その一方で私は、ひそかにここにあるのは、「雰囲気」だけではないのだろうかと思っていた。「芸術的雰囲気」などというあいまいなものをねらうな、ただ正確に書くということだけを心掛ける、というのは太宰自身がやかましく私たちに言い聞かせたことで、いくつかの文章にも書いている。にもかかわらず、『斜陽』では、太宰は「雰



「氣」を書こうとしているのではないかと思わずにはいらなかったのである。

もっとも、みながみなそんな思いで読んでいたわけではない。たとえば『フォスフォレスセンス』とか『おさん』『桜桃』などという作品には、おそろしいようなものさえおぼえていた。そこでは、太宰は「芸術的雰囲気」どころか、なにごともおねらいなんかしてしてはいない。ただ投げやりなまでに無造作な筆致であった。それでいて、的確に「事実」以上の何かがかこちに伝わってくるのである。

しかし、金策に追われ、不義理を重ねて顔を合わせられない人も次から次にふえてゆく中では、やはり落ち着かない思いだけが先に立ってしまうのだった。

そういう状態の中で、私は、太宰が血を吐いたという噂を聞いた。その少し前には、その年の正月、年始まわりに行った太宰が、ある先輩のところから泣いて帰ってきた、それほど太宰はいま文壇の中で孤立させられているという話を、東京のジャーナリストから聞いたというので、わざわざ教えてくれた大学の先生もあった。そうしたやさき、八雲書店から太宰の全集が刊行されることになって、町中の書店にポスターがはられ、デパートのショウ・ウィンドウにさえ、太宰の大きく引きのばした写真がかざられた。

その写真の一つは、横むきになって頬に手をあてている顔の大写しだった。それは、明らかに芥川龍之介のやはりあごに手をあてている写真を意識したものだ、と私には思われた。(後に、弘前高校時代の太宰が、芥川の自殺した時かなり興奮して「作家の死に方は、こうなければ……」と語った、それほど太宰は芥川に傾倒していた、という話を聞いたが)私の知っている太宰は、あの芥川の写真にあらわれている芸術家的なポーズをひどく軽蔑し、悪口の対称としていたのだ。そして、もう一枚は、たぶん三鷹の駅近いどこかに例の二重回しを着てやや横向きに立っているものだった。この姿勢にも、私はある記憶があった。まだ飲む時間には少し早く、駅向うの古本屋で何ということもなく本をみているとき、突然太宰はグスッと笑声をあげた。英語で書かれた日本紹介のような本だったが、そこには太宰の古い友人であったある若い評論家の写真がのっており、*Japanese young great thinker* という肩書がついていた。その *great thinker* というのに太宰は大笑いして、その夜の悪口の対称となったが、太宰の写真は、その評論家のとっていた姿勢にそっくりであった。そして、太宰の写真は二枚とも、暗く悲しい表情をしていた。

私は、はじめ二枚の写真のかまえた姿勢も姿勢だが、この太宰の悲しそうな表情は、いったいどうしたことか、と思った。怒りに似たような感情さえこみあげてきたのである。

別離 「なんじら断食するとき、偽善者のごとく、悲しき面容すな」とは、いうならば、私たち

に耳にタコの出るほど聞かせてくれた戒律であった。太宰は、自らが軽蔑していた「深刻ぶり」のポーズをあえてとっている。それは、ジャーナリズムや戦後の大量にふえた新しい読者に対するの気取りであり媚態であるようにまず私には思われたのだ。私はひとり腹立たしく何度も舌うちする思いで街を歩いていた。どこにもその写真がある――。

だが、はじめにその写真を見た時のショックがおさまるにつれ、別の考えがうかんできたのもまもなくだった。あえてどうしてあんな表情をさらしてみせているのか、あるいは「戒律」もなにもかまってはいられないほどの、苦しさが太宰にあるのではないか。気取るだけの余裕もなにもないからこそ、太宰は、あのように露骨に悲しい表情になっているのではないか、そんな思いがしきりにしてきたのだ。太宰があのような表情をするのは、ただごとではないように思われた。

私は、どうしても上京しなければと思った。借金の中から借金をして、すぐその夜のうちに東京に向った。

だが、やはり、太宰には逢えなかった。

うなぎ屋の若松屋の態度は、あいまいで割り切れないものがあつた。前にも居留守を使われそうになったことがある。私は、自分がこのごろ太宰とその周囲に軽んじられているという思いがあるだけに、ややヒステリー気味に執拗に若松屋を問いつめた。しかし彼

は、あくまでも言を左右にして確かなことを言わない。そのうちにふと、太宰の居るほんとうの場所を若松屋も知らないのではないか、それを彼自身がごまかしているのではないか、と思われてきた。「いや、近ごろは太宰先生は私のところへあまり連絡しませんから」などというのには、どこか本音のようなどころもあった。「でも、三鷹に居ることは居るのだろう」「それはもう」なども言うのであつた。太宰は連絡場所をかえたのかもしれないが、私には若松屋しかカギはなかつた。

もちろん太宰の家もたずねてみたが、何もわからなかつた。ちよつとの月日に、玄関の壁がおちたりしていて、家全体がひどく荒れた感じになってしまつていた。

二日目も同じことのくりかえしだった。私は、夕方まで待つてひよつとして太宰が通りかかることを期待して、駅前の通りから通りをうろついた。太宰がゆきそうな飲み屋も、一軒一軒のぞいてみた。しかし、太宰はどこにも居らず、「この頃みえません」「おられません」と言われるのだった。

そのうちに私は、ひどく白々しいような、情ないような気持になつていった。私が太宰に逢つたとて、太宰の苦しみをどうすることができらうと思われてきたのだ。結局、私は太宰に甘えるだけではないのか。仕事をしているのなら、太宰の健康もそう心配しなくてもよいのだろう。私は、どんな小さなものでもよいから、きちんとした作品をもつて、今度は上京して来ようと思つた。このごろの自分の生活ぶりのことが、つくづくと思われた。

これが太宰の生きているうち、三鷹をたずねた最後になつてしまつた。